

会長メツセージ

「明るく前へ」

今年も9ヶ月が過ぎましたが、新型コロナウィルスの蔓延は厳しさを増すばかり、終息の気配は一向に見えず、連日のコロナ報道にうつうつとした気持ちにされているある日、一服のカンフル剤のような言葉に出会いましたので、紹介いたします。

『芸道は無窮なり』

我が国伝統芸能の代表格で、詩吟より歴史も古い狂言の世界で4歳で初舞台を踏み、80年以上狂言一筋に生きてきて、卒寿を迎える今も現役で舞台を踏み続けている狂言師・野村 萬さんの言葉です。

野村さんは常に新たな方向を模索し、挑戦し続ける中で、「芸能」というものは長い歴史の中でいくつもの試練を乗り越え、そこで何か新しい発見をしながら今日まで伝承されてきた。」と仰る。そして今のコロナの惨状を「とても大変な出来事である事は確かですが、先人の苦勞を思えば乗り越えられないはずはない、どうやって乗り切っ



総本部長 地藏 哲皚

て次に花を咲かせるか、いまはガマンしながら根を強くするいい機会でしょう。」「芸能というのは咲き誇る花でなければいけないが、それを支える根っこは本当に強くて深くなくちゃいけない。」とさりりと言われる。

『一生初心』

これを聞いて、私は宮崎東明先生を思いだしました。

90歳の野村さんが4歳と言えば86年前、丁度関西吟詩創立の昭和九年に当ります。この年に宮崎東明先生は一念発起して関西吟詩同好会を立ち上げました。その後手弁当で奉仕を続け順調に発展しましたが、第2次世界大戦勃発によつて会員も四散し活動中断を余儀なくされ解散のピンチに陥りました。これは86年の歴史の中でも、今回のコロナを超える最も苛酷な危機であった事は明らかです。然しながら先生は戦禍に耐え、戦後の窮乏生活にも耐えながらも、「詩歌吟詠を愛する心」と「関西吟詩の灯は絶対に消さないという強い使命感」を会訓「一生初心」